

トマト選果にIoT

静岡・浜松商工会議所 アグリテック発表会 GPS活用例も

【静岡】浜松商工会議所は30日、「はままつアグリテック推進プロジェクト」の事例発表会をウェブ上で開いた。プロジェクトで開発したミニトマトの「IoTはかり」（自動選果計量機）を、実証農家となった浜松市の鈴木崇司さん（42）と、開発に当たったITエンジニアの名倉真史さん（44）が紹介した。選別作業を7工程から3工程に省力化し、果実200^キ当たり2000円の収益増になったと発表した。

選果作業は、重さ10^キ。

のコンテナを運び重量確認を繰り返す作業が課題だった。「IoTはかり」は、安価な部品を使って既存の小型選果機に40万円です自動計量システムを作り取り付けた。データはインターネットで蓄積し、経営分析に使

る。鈴木さんは収益性を試算。新たな装置代と通信費で、固定費が果実200^キ当たり10000円増えるが、省力化で人件費は減り、利益は同2000円向上するとした。選果作業を社員からパート従業員にすると利益

は5000円となり、蓄積データから顧客ニーズに対応して単価を高めれば、利益は8000円に達すると見込んだ。新型コロナウイルス禍のような突発的な価格低迷時も、10000円の利益を確保できるとした。ソミックマネージメン



鈴木さんの農園で実証試験をしている「IoTはかり」の試作機

トホールディングスは、自動追従型や衛星利用測位システム（GPS）で自動運転する自律走行ロボット「SUPPOT（サポット）」を紹介。200^キの荷を積み傾斜地や不整地を走行できる。JAみっかびでの試験を動画で紹介した。

021年12月の製品化を目指す。
浜松市の農業法人、京丸園の鈴木厚志社長と川口久寿部長は、作業室のコロナ対策で作った二酸化炭素濃度測定器、発芽室の温度計、液肥タンクの残量計の3IoT（モノのインターネット）機器の事例を紹介した。